

◎「ホンダのナビは ばかだ あほだ これ見てよ」500 万円の新車を運転しながら衣川さんがナビを指差す。「あれれ そういや 自分が走ってる道と まわりの道が 簡単に出る だけ 建物も 鉄道も 川もないね」助手席でぼ〜っとナビを見ていたが、まじまじ見ると地図機能を失くし、我が行く道を中心に表わしているだけ、いたく抽象的である。「地図が欲しい まわりの建物の名前 鉄道の線路の名前 駅の名前 川や海の名前 今何県 今何市 今何町・・・」名前も知りたいよね。

◎「前のホンダも 右と左を 間違っ て 教える」「岡村さん あのナビ 信用したら アカンよ」という。その時はえらく大袈裟にいうねえ、そこまで馬鹿じゃないだろうと思っていた。先日“行者還岳”からの帰り道、「地道で帰って見るか」とナビを入れた。往路は早朝だったことと高速道路を使ったので2時間半で到着した。復路は4時間半もかかってしまった。帰りはゆっくり街中を通してホームセンターで、「掃除用 コロコロとユニクロで 毛糸の帽子を二つ ゲットしたい 店に寄れば 休憩もできる トイレもできる」そんなことで悠々と走っていた。2時間ほど走った奈良県の知らない町で、多分ホームセンターだろうという店を見つけ駐車した。「え〜と コロコロ え〜と トイレ」まずは1点解決。なかなか大阪に近づかないね、時間ばかりがかかるね、まだ奈良だね、なんてぼやきながら助手席のバナナを喰ってお茶を飲んだ。この時点で、「このナビは いかに地道とはいえ いかに田舎とはいえ 細い道ばかり選ぶじゃないのかなと思っていた。

◎ナビ君、右へ左へと誘導してくれるが、「え なんて こんな 細い道」一方通行の路地のような道を案内してくれる。「むむ やはり こいつは あほかと」一回目の疑いを持った。このままだと夕方になってしまうぞと思いつつも生駒のあたりを走っていると、ユニクロがあった。「反対車線だけれど ま いいか」とハンドルを切って駐車場に車を止め、店の中に入り以前から決めていた毛糸の帽子を2個ゲットした。実は夏に白い毛糸の帽子を断捨離で捨ててしまったが、夜の徘徊には白い帽子が欠かせないので黒と一緒に2個ゲットしたのだ。断捨離はいいことなんだけれど、夏の暑い盛りに防寒具をやたら捨てるのはいけないね。

◎もう夕方になりそうというところでやっと知った道、走り慣れた道の163号線に乗ることができた。「やっと 知った道 これで安心」とどんどん進んだら、「この交差点を 右です」とおぬかしになる。「え 姉さん まだ早いんじゃない」と言いながら通り過ぎいつものところを右折した。今地図を見て調べると、まんざら間違いではないがオレがいつも使う道とは違う道を教えてきたようだ。奈良県下の古い町並みの細い道路、多分旧街道だと思うが、なんで好んで細い道を、今の時代、田舎だとはいえもうちょいスイスイ走れる道、中央分離帯のある道もあるはずだと思うが、とあきれている。ナビ君が言うように進んでも、多分行き着くところは同じだと思うが、急ぐ旅でもないが、ちゃんとした道を案内してよ、とぼやくオレである。

◎今乗っている車はもう14年目、ナビ君の情報も14年前のモノ、新しい道は認知していない。行く前に目的地の名称を入れるが、なかなかうまく入らないのはオレがへたくそなのか、ナビ君の情報が少ないのかわからない。スマホの地図を使って誘導してもらおうのいいと聞いているがその操作も下手くそである。早くスマホのグーグルマップを使いこなせるようにならなければ。

◎山に登っても、歩いても、車で走っても、最新のGPS機能はまことにありがたいが、使いこなせるように努力しなければといつも反省である。

ソロモンの指輪：コンラート・ローレンツ著：日高敏隆訳

◎衣川・上西・岡村の3人で鳥の話を中心にやり取りをしている。上西かんちゃんは30歳代から淀川の鳥を観察して、玄人はだし（専門家がこれはかなわないと慌てて逃げるほどすごい意）の方で、あとの二人は彼の意見を聞きふんふんとわかったようなことを言い、「昨日こんな鳥を見た、動物がこんなことをしていた」なんて見聞きしたことを話している。

◎この本は、かんちゃんから衣川さんへ、そしてオレンチへやって来た。

◎ソロモンの指輪：エルサレム宮殿がいつこうに完成せず、困っていたソロモン王は、岩に登って祈った。すると、大天使ミカエルが現れ王に指輪を授けた。指輪は真鍮と鉄できており、真鍮部分を用い呪文を唱えようと天子を、鉄部分を用い呪文を唱えようと悪魔を従えることができた。また、動植物と会話することもできた。

◎ソロモンの指輪のことを著者の先生が書いている。旧約聖書に従えば、ソロモン王はけものや鳥や魚や地を這うものどもとも語ったという。そんなことは私にだってできる。ただこの古代の王様のように、ありとあらゆる動物と語るわけにはいかないだけだ。その点では私はとてもソロモンにかなわない。けれど私は、自分のよく知っている動物となら、魔法の指輪などなくても話ができる。この点では、私の方がソロモンより一枚上手である。ソロモンは指輪なしでは彼に最も親しい動物の言葉すら理解できなかったのだから。そして彼が指輪を失った時、動物の世界に対する彼の心は閉ざされてしまった。彼の999人のお妃のひとりが若い男を愛していると、一羽のナイチンゲールがこっそり彼に告げた時、彼は怒りのあまり指輪を投げ捨ててしまったのだ。

◎この話を読み、話はそれるが言葉のはじまりの話を。“家”という単語と“好き”という単語の組み合わせで様々な話ができあがる。「家が好き」「好きな家」では意味が違ってくる。オレ原人が、床を指差し静かに小声で、「好き好き」とつぶやけば、「家が好き」の事かな。オレ原人が、家を大きく指差し、「好き好き」とわめけば、「好きな家」の事かな。こんな風に突き詰めていくと、「会って 話さなきゃ 額を突き合わせて 話さなきゃ 真意が伝わらねえ」に行き着いてしまうのかな。ヒトの思っている真意、これはなかなかかわからないねえ。

◎本の最後にかんちゃんの言葉「1992年 読了 楽しみつつ また会ったの 感慨をこめて」と書いてある。なんと33年前、かんちゃん50歳ぐらい、まだオレとお会いしてない時代だ。

◎刷り込み：この言葉は以前から知っていたが、あらためて検索すると、特に鳥の話、今回のこのテーマと同じ内容だそうである。

動物、特に鳥類が、生まれて間もない時期に最初に見た動くものを親だと認識し、一生その対象を追従するようになる特殊な学習現象の事。AI氏の弁。

◎ガンの子マルティナ：

先生、30日間ガンの卵を温めてきた、とはいえ、28日間はガチョウや七面鳥にお任せして、最後の2日間だけ孵卵器に入れたそうだ。ガンは卵の中でカリカリゴソゴソ、合間にピープと響く低くやさしい声が聞こえる。卵に穴が開く。そしてその穴から鳥の最初の姿がちらりと見える。卵歯をかぶった鼻先が頭がさかんに動いて、卵歯が卵の殻に押し当てられる。＜中略＞首が出て、身体の平衡を保ち、上下の区別がつき、頭をまっすぐ持ち上げることができるようになるまで数時間かかる。殻から這い出した濡れた生き物は、信じられぬほど醜く、実にみじめな姿をしている。＜中略＞

彼女は頭をしゃんと支え、何歩か歩くようになるまで私は待った。彼女は頭を少しかしげ、大きな黒い目を上げて、私をじっと見つめる。長い間、実に長い間、ガンの子はわたしを見つめていた。私がちょっと動いて何かをしゃべったとたん、この緊張は瞬時に崩れ、ちっぽけなガンはわたしに挨拶を始めた。つまり彼女は首をさげて私の方にぐっと伸ばし、すごく早口にハイイロガン語の気分感情声をもたらしたのである。

彼女の黒い瞳でじっと見つめられた時逃げださなかったばかりに、不用意に二言三言何か口を開いて彼女の最初の挨拶を解発してしまったばかりに、私がどれほど重い義務しよひこんでしまったか……。著者の先生は彼女から親と思われてしまったのである。

- ◎夜の11時、スーパームーンの翌日の今、真っ暗な中、今庄ICから30分足らずの道、川崎さん運転の車で“夜叉が池登山口”に向かって車を走らせている。「運転は大丈夫 疲れない」というのであまえている。ここは、“今庄のカツラ”で有名な所、山に向かって鳥居がありトイレと水道まである、土の駐車場で幕営なり。
- ◎「ちょっとだけ 飲みましょう」とコンロで湯を沸かし。焼酎とウイスキー、ちびりちびりやりながら、ちくわの穴にキュウリを差し込んだもの、次に餃子が焼ける、美味しいものが出て酒が進む、1時就寝。
- ◎翌日は6時起き、湯を沸かしてもらいスープにパン、昼のヌードル用の湯を詰め、テントをたたみすべてを車に積み込んだ。車が1台長野県の女性、近所の宿に泊ったそう。夜叉が池は有名なようで下山時には5台も車が止まっていた。一人は重いカメラを担いで星を撮りに夕方に登って行った。
- ◎夜叉が池：美濃（岐阜県）の郡司が、日照りに悩まされる村人を救おうと宮参りの途中で一匹の蛇にで会い、「お前が雨を降らせたら どんな願いも叶えよう」というと、たちまち雨が降った。ところが翌日山伏が訪ねてきて、「私は揖斐川に住む竜神である そなたの願いを聞き届けた ゆえに そなたの娘を わしの妻に請い受ける」娘の夜叉姫が竜神に嫁ぎ自らも竜になった。＜福井県側でも 別の伝説があるようだ＞
- ◎地滑りによってできた窪地に、雨水、伏流水が溜まり枯れることはない。
- ◎ヤシャゲンゴロウ：世界でここにしかない種だそう。池の水は、清澄、低温、他からの流入が無い。
- ◎ゲンゴロウは日本で100種以上、おいらの幼少時代の田んぼにはたくさん居たね。アメンボ、ヤゴ、カメムシ、カブトガニ、ザリガニ、カエル、ヘビ・・・。
- ◎7：15 出発。でっかいカツラの木、鳥居をくぐり登山道へ、車が2台やって来て4人の方が登るようです。ザーザー流れる川の傍、階段があり、しっかりした造りの橋があり、クマ出没の看板があり、なだらかな道に落葉が積もる、褐色の枯葉の中に黄や赤の葉が混じる。どんより曇った空、今日は快晴の予報だったが降らなければいいやという状態、秋の服装に雨具の上着を防寒に着ている。
- ◎でっかいトチの木が2本あるところで一休み、水を飲みパンを齧った。この樹のまわりに柵がしてあり近づけない、そばまで行きたいのだけれど、行けないので見学通路はパス、柵は要るけれど邪魔だねえ。
- ◎崖の上を歩く、300Mほど下に流れがある。標高が上がり木々の緑が紅葉に代わっていく。この山は黄色が多い、赤色は少なく、レモンイエローが多いのにはうれしくなるねえ。
- ◎「斜面に生えたこの樹 ここ曲がってるやろ ここをアテという アテを使って 家を造ると クルってくるこれを アテが外れる という と法隆寺の棟梁の弁」「ほんまかいな うそかいな」「いやいや ほんま」本当に樹の曲がったところはアテというらしいが、棟梁の個人的訓戒かもね。
- ◎9：00 夜叉が池到着。グラウンドぐらいの大きさの池だが霧がかかって見づらい。「さあここから ヤブコギの山 カップの下を着けたほうがいい」腰をかけ靴を履いたままでゆっくりズボンを履いた。
- ◎9：15 乗越を出発。藪を手で払いつつ一步一步登っていくドッコイショ、園芸用の手袋が心地いい。葉や枝を掴み腕に力を込めて登ったおかげで足も腕も翌日は筋肉痛である。なんだか少しづつ明るくなってきてぼんやり紅葉の山々がみえてくる、コラショ。
- ◎ヤブコギの山と前宣伝、どれほどしんどいかなと思っていたが両手で葉や枝を掴んで歩くので、これはこれで楽しい。石のところもあるが滑らないとガシリ掴むところがあり安心して登れる。
- ◎11：20 三周ヶ岳てっぺんに到着 1292M 一等三角点があるだけで、標識も何もない。樹の間、視界の効くところ、山やま山が連なりこのあたりもまっこと山の国である。下山の途中に、「お 白山 雪が」と感激である。
- ◎同道の川崎さん、「ビールが オレを 待っている」とサンドイッチを喰いながらグビリ、オレは怖がりなので山の中ではアルコールは飲まない。「見てみ ストックをこっち向けに置いとく」「？」「たまたま 帰り道がわからんようになる それで ストック 帰る方角に 置いてる」「そんなこと 一度もなかったよ」
- ◎往路は三国ヶ丘駅で待ち合わせだったので、電車に乗って行った。復路は親切にも南茨木付近で降ろしていただき、20分ほど歩いて帰宅した。風呂に入り冷酒でいっぱい美味しいデアル。

ソロモンの指輪：コンラート・ローレンツ著：日高敏隆訳

◎著者の先生：オーストリア人だそうで、ヨーロッパ人、異人種の人たちがどういう感性をお持ちなのかな、なんて思ってしまいが、「そんなもん おんなじじゃ」思うようにしよう。この先生、生き物に対する接し方、気持ちの入れようが尋常じゃない。オレは 30 歳代に動物園に行った時、オオカミが数匹檻の中で右エ左エ足早に右往左往するのを見ながら、一匹のオオカミ君と目があった。彼もオレを見た、「オオカミと アイコンタクトができるのだ」という不思議な感覚を覚えた。その時オレは何を想っていたのか、オオカミ君はオレの目を見て何を想ったか、それはわからないし、たんに目があっただけかもしれない。それから中年になり熟年になり、近所の犬の目を見つめるようになると、飼い犬の三分の一ぐらいの割合で、彼らもオレをじっと見つめる。「犬にも感情があるのだ オレのことを いたく 気にしている」と感じるようになった。恥ずかしながら話はここまでで、それ以上は進まないし、著者の先生のように生き物にのめり込んではいかない。

◎ヤシャゲンゴロウ：世界でここにしかない種だそうだ。おいらの幼少時代の田んぼにはたくさん居たね。アメンボ、ヤゴ、カメムシ、カブトガニ、ザリガニ、カエル、ヘビ・・・これは先日登った夜叉ヶ池にいるゲンゴロウの話だが、先生が本の中でゲンゴロウのことを書いている。これにはその偶然を驚き、ゲンゴロウとはどういう奴かと検索し身近に感じた。

◎オレが子供の頃には近所のため池、田んぼ、小さな川にはゲンゴロウがいたように思うが、今は少なくなっているらしい。彼は水中甲虫類では最大、“源五郎”言われるぐらいに身近な昆虫で食べる地域もあったそうだ。激減した理由は稲作方法が機械化や肥料の問題で水田の姿が半世紀前から変わり、一時期干上がることによってゲンゴロウが生きていけないらしい。

◎著者の先生の話は、甲虫のゲンゴロウの幼虫時代の事である。幼虫はゲンゴロウの丸こくかわいい甲虫の姿ではなく、“田むかで”とも言われるように、8センチぐらいまでのムカデのような姿をしている、生虫と幼虫はまったく違う、蝶と毛虫のように。幼虫君は凶暴で水中のトラとも悪魔とも呼ばれる。

◎変態：昆虫の 75%が完全変態を行う。卵・幼虫・さなぎ・成虫で不完全変態は蛹の部分を省略する。なぜ虫は変態するのだろう。それぞれの 3 段階 4 段階において、世界が、空気が、食べ物が、形がまったく違う。同じ生き物なのに、まったく違う物に変態するという不思議な魅力。

◎ゲンゴロウの幼虫と同様に、水中のギャングはトンボの幼虫の“ヤゴ”である。ヤゴは水中昆虫ながら水底を歩く。離れた距離から獲物を捕食するスピードと精度は屈指で非常に獰猛な捕食者である。

◎水槽の中の二人の殺人犯：水槽の中の世界にも、恐ろしい肉食動物がたくさんいる。そこで生存のための陰惨で仮借ない闘争が我々の目の前で繰り広げられるのだ。網で一度にいろいろな動物を掬ってきてアクアリウムの中に入れておけば、まもなくこの闘争を眼のあたりにすることができる。

◎水中昆虫ゲンゴロウの幼虫が混ざっている。獲物の相対的な大きさや、その貪欲さ、獲物の殺し方の狡猾さを考えると、トラ、ライオン、オオカミ、シャチ、サメ、狩人バチのような名うての捕食動物も物の数ではない、ゲンゴロウの幼虫に比べたら、彼らはまるで子羊だ。

◎ゲンゴロウの幼虫は静かにじっと待ち伏せし、突然電光石火のごとく獲物に向かって飛び出し、その下に潜り込み、大きな顎で銜えている。幼虫にとって動く動物はすべて獲物である。幼虫は、「体の外で消化する」数少ない動物である、獲物に注入する分泌物は獲物の内臓を溶かして液状化して管を通してこれを吸い込み胃の中に納めてしまう。太ったおたまじゃくしやトンボのヤゴほどの大きな獲物でも身体はたちまち硬直し、ブクブクになり、吸われた後はしばみ捨てられる。獲物がいなくなると共食いが始まる。二三の齧歯目以外、普通の動物なら餓死しそうになっても共食いまで発展しない。

◎「体の外で消化する」これはどういうことだ、消化液を獲物に注入し、どろどろになったスープを吸うだって。

◎「鬼嫁だ 勝手なことバッカ いいおって」「あいつは 夜叉だ」かつて友人が自分のカミさんを盛んにけなし
ていたが、今はその彼女の介助が忙しいと言っている。夜叉とは鬼のように身勝手に恐ろしいものだと思っ
ていたが、先日の夜叉が池伝説では可愛い娘を“夜叉姫”と名付けている。夜叉とはなんの事かなと・・・。

◎夜叉が池：美濃（岐阜県）の郡司：安八太夫（あんぱちだゆう）が、日照りに悩まされる村人を救おうと宮参り
の途中で一匹の蛇にで会い、「お前が雨を降らせてくれたら どんな願いも叶えよう」とつぶやいた。大夫が家
に帰ると、なんと雨が降り田んぼに水が溜まり、村人も太夫も喜んだ。ところが雨の翌日にひとりの山伏が太
夫のもとを訪ねてきて、「私は揖斐川上流に住む龍神である そなたの願いを聞き届けた 私の願いとして
お前の娘を 我が妻として差し出してもらおう」大夫は困ったが、三人娘の中、夜叉姫が村人を救ってくれた
お礼にと、妻になることを申し出た。夜叉姫は龍神の妻となり、自らも龍に化身して揖斐川上流の池に住むよ
うになった。その池を夜叉が池と呼ぶようになった。

◎夜叉が池：福井県今庄の伝説：夜叉が池に住む蛇が、母娘が住む家に男に化けてかよった。娘が次第に痩せて
くるので母が心配して尋ねると、「男が台所の水の口からやってくる」という。母は夜、娘のそばで寝る男の着
物に糸を縫い付け、翌朝糸をたどると夜叉が池に着いた。そこでは蛇が大暴れして死んでいた。その後は母は
娘を熱い菖蒲湯に入れると蛇の子をたくさん堕した。

◎奈良の三輪神社起源：美しいタマヨリヒメのもとに、容姿端麗な男が夜ごと訪れ姫は懐妊する。両親は男の素
性を知ろうとして、娘に、「男の 着物の裾に 針で 麻糸 通しなさい」と教えた。翌朝糸をたどると、三輪
の神社に至った。両親は男の招待が三輪の神、蛇の姿を知った。ヒメが生んだオオタタネコは三輪の神を祀る
神主となった。

◎現代人は蛇嫌いの人が多い。オレも好きかと言われれば好きではない。縄文時代の資料では蛇の姿がたくさん
出てくる。外国のモノも蛇の姿がたくさんある。古代の人は、縄文人も含め、蛇を神格化して崇拝していたの
かな。「蛇を神なんていうが 形として 細長いだけで 形造りやすい だけじゃないの」オレの弁。

◎11 月も半ばを過ぎた。河原に来ている、いつもの体操をするベンチのあるところ。今日は少し暖かい、T シャ
ツに厚めのジャンパースタイル、空を見上げると青空に白い雲があり黒い雲もありという晴れの日である。来
週は 12 月並みに冷え込むと予報氏が言うが、だんだん寒さにも慣れてきて心地いい。オレは寒くなると身体
の調子がいい、暑いとダレて駄目だねえ。

草の上をちっちゃい蝶ちょが飛んでいる、白っぽいグレーが一匹だけ、あの小ささは蛾かもしれない。蝶のこ
とで驚くのはあのひらひら飛びで何千キロも海を渡るのは信じられないねえ。＜日本で唯一渡りをする蝶はア
サギマダラ、和歌山、香港間など 2000 キロ以上飛ぶそうだ＞

先ほどは新幹線の轟音が、今はジェット機の轟音が、轟音と言っても遠くの方で鳴る小さな轟音である。時々
来るおっさん、トロンボーンの練習音ふんわらほんわら。そう、この傍に貨物の引っ込み線があり川を渡る橋
がある。ごとながたん、何十両も貨物車を引っ張って電気機関車、その名も“桃太郎”とか“黄門様”とか（こ
れは嘘だが・・・）がたんごとな。

安威川の流れ、スーイスイ、透明な水が静かに流れる。この安威川、オレが子ども時代、小学生の頃も中学生
の頃も何度か来たことがある。そういやあ泳いだね、当時は汚い水だったが水中眼鏡を通して魚がたくさん泳
いでいた、今も魚の姿がたくさん見られる。

それから高度成長時代、排水がどんどん流れ込み、グレー色の水が泡を吹いて漂っていた。多分この安威川の
底を掻き回すと当時のヘドロが積もっているはずだね。

今日は鳥が少ない、お休みの日かな。昨日はたくさんいた。カモ類が 20 羽 30 羽、アオサギ、シラサギ、鶺鴒、
大きさにかかわらずじっとしていたり、何かをついばんでいた。カラスに交じって上の方、カラスがいなく
なってもふわり浮く鳥、「おお ありゃ猛禽 チュウヒか オオタカか」

◎絵のことで、というよりオレが絵を描くことで、「うふふ いけるぞ」と思う話。もうジジイになって、「オレのえかき人生も最晩年かな」と思っていたが、ふといい方法を見つけ、これならしばらくやっていけるぞ、とニヤリしている話をちょっと聞いてくれ。「ない テックの話か？ sense センス：感性の話じゃないの？」「いやいや そんな雑多なことを聞きなさんな 方法も 感性も 全部 おーる オレ じゃ」

◎河原を走っている、いつもの安威川河川敷を西に向かって走っている。まだ3時半という時間だけれど冬至があと一か月という今の季節、5時には暗くなる。5時に暗くなるということは3時半と言えども日没の1時間半前、立派な夕方である。お陽さんはまだまだ勢よくピカリ光っている、そのピカリがベンチのあるところ、そこらあたりに光が当たってピカリピカリ眩しくこっちに照り返す。あそこはコンクリートの砂利仕上げ、専門用語で“洗いだし”というらしい。この洗い出しという工法の砂利敷き、少々古めかしく昭和の雰囲気かも知れないが、オレは意外と好きである。

◎洗い出し：「知ってるか？」洒落た家やら、料理屋の玄関先のコンクリートの中に、砂利や小石を埋め込んだもの。施工方法はセメントにきれいな砂利を混ぜて塗る。塗ったあとタワシで擦って水をかけて表面のセメントを洗い流すと、きれいな小石がコンクリートの中にずらりと並ぶという仕掛け。

◎絵の話と言っても絵を口語にしても文語にしても説明するのは難しい、「絵なんて 見ないとわからん 口でいっぱい説明して つうじん（通じない）」簡単に言うとういうことで、感性の話、感情の話、いいかげんな話、抽象的な話、まったく別な比喻、なにが出てくるやらではありますが・・・、いいですよ。というのはここ5年ほど、“袈裟懸け”のような線を面を画面に入れて楽しんでいました。10センチぐらいの幅の筆というのか刷毛というのか、それにたっぷり絵の具を着けて、ホイホイホイと箒を使うように掃いてきた。お椀のような器に絵具を溶き、ブツい筆で、キャンバスの上にズズズっとほりこんでいく。そのズズズットが上手くいけば成功、上手くいかなかったら失敗なんだけれど、そう、いつもいつも成功していたらこれまた面白くない。いくつかの失敗のあとの成功がうれしいんであって、常勝ではつまらない。ズズズットほりこんだ、その絵の具の味がたまらなく魅力的で我ながらほっとしてニヤリ喜んでいた。ニヤリついでに何枚も描いてきた。「なんで何枚も描くの？」それはね、一度その方法が成功だと感じると次は失敗したくないということと、成功するとわかっていればそれをもう一度味わいたい、何度でも味わいたい、なんていささか俗っぽいね。

◎入れる色はほぼ決まっている、絵の具の赤と青と緑、赤が3色、あおが3色、緑が3色、なんてふうに決まっている。他の色に色気を出して使うこともあるが、これはたいがい失敗する、慣れたもの、親しんだものがいんだねえ。絵の具の色も50年前の初心者の頃には、「なにがどの色で どの色がなにで 」なんてまったくわからないのに、生意気盛りの青年が一丁前に絵の具の話のを饒舌に語ったりして、今聞くと笑ってしまうようなことかもねえ。某君が、「私の絵の批評で この カドミウムイエローデープが 効いている」と〇〇先生が言ってたけど、「えかきは 絵の具の名前まで 当てるんだ すごい」と聞いた。「そらあ ほんまかいな」と耳を疑うが絵の具に気をつけているえかきならそれぐらいのことはわかるかも知れないね。カドミウム系の絵具はチョイお高いが渋い発色で好きである。

◎来年の12月にオレは80歳になる、80歳なんてと大袈裟に語るのは次回にして、この80歳のその日を会期中にしてに展覧会を予定している。その1年先の展覧会で、どの絵を出そうかと思いつながらまだまだ先の事と日常生活を楽しんでいた。ふとパソコンの中に入っている画像をいくつか出し見た、2年前3年前の展覧会の写真、2年前3年前に描いた絵の保存画像、それらを見ていた。2年前の同展覧会場の写真を見て、「あちゃ〜出そうかなと 思っていた絵 もうすでに 飾っている」ということに気付いた。あれこれ見ているうちに、「さてよ 新作もいいが これらの絵の反転も 面白いのでは」と閃いた。「袈裟懸けの反転 表と裏 ポジとネガ オスとメス」表現はどうでもいい、これに挑戦してみようと考えだした。50号のキャンバスを7.8枚作ったがまずは小さいもので実験、10号、20号、30号と描いてみた。「ふふふ いけるじゃないの いいじゃないか」である。さて、「なんことか わからんぞ」「がはは わかってたまるか」「えらそうにゴメン」

◎9:00 歩き始めた。久しぶりの東吉野村、榊井君の家の前を通り過ぎ大又の登山口駐車場までやって来た。1 年ぐらい前、川崎さんに連れてきてもらった薊岳にもう一度登ってみたいとやって来た。調べると 1 年も経ってなく今年の 4 月だった。東吉野村役場から 30 分ぐらい走らせたところが終点である。駐車場はすでに標高が 700M 近くあり、道路に出ていた温度計は 2 度だった。「日本は 秋が無くなった」というほどにいきなり寒さがやって来た、10 月の中旬まで夏日が続きフーフー言っていたのに 11 月の下旬の今防寒具が欲しい温度である。もっとも大又のこのあたりは山に囲まれた谷筋で陽があたらず冷え冷えしている、登る斜面も北側の急登、雪が降り凍てつけば近寄りたくないところかもしれないね。

◎1 時間ぐらいで一本取った。この登山道は針葉樹の植林地帯、下の方は桧が、上の方が杉がとずんずん続く。針葉樹の森は暗い。大きく育って間もなく伐採かと思われる森、樹々はまっすぐ垂直に伸び上の方に葉を茂らせているので、見上げて青い空がチラリ見えるだけ、前も後も薄暗らく景色は見えない。ただただ我慢でえんやこら登っていく。下枝が無く上にまっすぐ伸びた太い幹は垂直の世界、樹の下の方の枝がほとんどなくそれはそれでキレイだけど、オレは針葉樹林帯の中を歩くのは好きではない。紙の地図を出して、スマホの地図で現在地を確認すると、「もう 5 ぶんの 3 登って来てますよ 乗越までもうすぐだ」

◎10:30 乗越に到着、登ってきました。少して前から上の方に空が見え始め、「お もうすぐだ」と期待したがすぐまた次の登りが現れ、そしてまた空が見えたが次の登りが現れなんてことを 3.4 回繰り返したが、「こんどは上の方に 標識らしきものが 見えたような」と到着した。陽の当たらない北斜面、針葉樹の薄暗い登山道は寒い、今年一番の寒さで手袋が欲しいぐらいだった。乗越の平らな地面にはお陽さんが届き多少暖かいかなと思うでしょうが、高度もあがりなお寒い。水を飲みバナナを食べパンを齧った。水は 1.5 リットル持ってきたが帰るまでに 0.5 リットルぐらいしか飲まなかった。寒いとはいえシャツの中は汗が出ている。

◎冬になると毎年厚手のシャツを着ているが、山の日には化繊のシャツを着ていた。厚手の温かシャツを着古して薄くなってきたのでもう一度同じものを買ってみようかとタグを見ると、アクリル 90%と毛 10%と書いてある。「なんだ 化繊だったのか なら 山もこれでいいじゃん」多分イオンで買ったような覚えがあるので売り場に行ってみると、「これです 今日安売りデーです 3000 円が 2000 円で買えます」そう言われ試しに 2 個買ってみた。着古してはいるが持っているものと同じ品物で、ちょい分厚いが暖かくて気持ちがいい。「ユニクロの下着が 暖かくて 最高」と家族が言うが、「オレはこっちの方がいい」「そっちは 分厚い それが難点 分厚いとねえ・・・」「オレは 着ぶくれても 温かい方を とるね」

◎陽の落ちるのが早い今の季節、薊岳をやめ明神平の方に進んだ。ブナの木が多い、姿のいい太いブナがたくさんあるが、もう全部が葉を落とし冬の姿である。麓の方は赤や黄の紅葉がまだ残っていた。

◎「比良に行きませんか」と 4 人に声をかけたが八尋さんだけが行きたいと返事をくれた。5 歳上の方、車で 20 分ぐらいの高槻市在住、二人だけの山行なので家まで送り迎えをした。交通費は高速代が 3000 円ガソリン代が 3000 円だというと、4000 円いただいた。往復の運転時間は往路 2 時間半、復路 3 時間であった。

◎11:30 前山に到着、1400M あるらしい、前山とはどういう命名だろうね。尾根道に登り陽があたれば多少は温かろうと思ったが寒いのでヤッケを出して昼飯にした。今日はさほど寒く無かろうと、暖かい湯は持ってこずごはんとお卵とじ野菜炒めである。寒いとはいえまだまだ冷たいごはんがおいしくいただけた。オレは明神平あたりの景色をいたく気に入っている、いつ来ても素晴らしい、草原のような枯草むらが山肌を大きくうねり、所々に樹がポツリぽつり、白い岩がごろり、いい景色だよ。

◎半分ぐらい下りてきた、2 時には車のところに着くかな。たった 2.3 年前だが、岩の下り、渡渉、そんなときにへっぴり腰に歩いている方を見て笑っていたが、なんとオレも怖くなってきた、大きな段差、岩の上り下り、石をまたいで渡渉、そんなときは両手を使ってえいこらしよ、慎重に行かなければ、笑われても事故の無いのが一番である、と自身にいい聞かせている。

◎2 時半に車で出発して 5 時半に帰り着いた。風呂に入って、ハイボールを飲みつつ晩飯を食った。